

# 生者と死者ということ



渡辺 利夫  
公益財団法人オイスカ会長  
拓殖大学前総長・元学長

執筆者紹介  
昭和14年山梨県甲府市生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士。専門は開発経済学、アジア経済論。筑波大学教授、東京工業大学教授を経て拓殖大学教授。専門分野以外に『神経症の時代』（文春文庫）、『放哉と山頭火』（ちくま文庫）などがある。

## 「死者の民主主義」

ギルバート・チェスタトンという思想家がいます。深い思索、思索を文章化する才能の高さには実に圧倒的なものがあります。

今、私の机上に『正統とは何か』（安西徹雄訳、春秋社）がおかれています。その中でチェスタトンは「死者の民主主義」という言葉を使ってこう述べています。

「伝統とは、あらゆる階級のうちもつとも陽の目を見ぬ階級、われらが祖先に投票権を与えることを意味するのである。死者の民主主義なのだ。単にたまたま今生きて動いているというだけだ」

世にはおりません。生者である私もいざれ死者になっていきます。死者がいなければ生者もいません。私ども生者は、はるかなる祖先に発して曾祖父、祖父、父母を経て今ここに存在するのです。生者は祖先からつづく長い血脈の中を生きている一人の「旅人」なのです。

死者は死者であるがゆえに声を発することはできません。しかし、生者は死者の声を聞きながら生きて、そういう観念を失ってはならないと思うのです。「根無し草」にならないためです。

私は社会が進歩するものだと思える「進歩史観」の立場を取りませぬ。私の青春時代など、アカデミズムもジャーナリズムも左翼が大手を振って闊歩しておりました。私はそれに同調しませんでした。逆に、人間と社会は同じようなことを飽きもせず繰り返すものだと思える「循環史観」の立場にありました。だって、そうじゃありませんか。チェスタトンはこういつています。

「進歩は必然であり不可避である。あると聞かされたのでは、政治的行動を起こすべき理由は何もなくなくなる。それなら何もする理

由はなくなり、何もしないという理由ができるだけである。手を下さずとも必ずよくなる。決まっているのなら、手を下してわざわざよくしようと努力する馬鹿がどこにあるか」

## 個人主義どう捉えるか

私どもは、祖先に発して少なくとも私にいたるまでの道程、つまりは伝統の中を生きています。伝統という少ししかつめらしいのですが、再びチェスタトンの言葉でいいますと「過去の平凡な人間共通の輿論」ということです

人間というものは、いつの時代にあっても不完全なものです。わが胸に手を当てるまでもなく、私という人間の不完全さはいやというほど私にはわかっていきます。人間は祖先の時代からずっと不完全だったのです。その不完全な人間が社会を紡ぎつつ、ほんの少しずつ堆積させてきた人間の知恵の塊、これが伝統的なではないでしょうか。これを大事なことだと考えないというのは、よほどの無神経か、もしくは傲慢な「主義者」だというより他ありません。死者が織り紡いできた伝統に信

を置かない人間は、大抵が個人主義者です。いったい「個人主義」とは何ものなのでしょう。次のようなアングルからこのことについて考えてみませんか。

幕末期に敢行した三度の洋行を通じて、欧米の文明に対する関心を強く促された人物が福澤諭吉です。福澤は欧米の文献の収集に大変なエネルギーを注ぎ、購入した文献を読み漁り、文明を構成する重要な概念についてはこれを翻訳していききました。

欧米の文献の中に、インディビジュアル (individual) という用語がしきりに顔を出します。いうまでもなく現在ではごく普通に「個人」として使われているのです。これをどう翻訳したらいいのか、福澤は苦心に苦心を重ねたそうです。インディビジュアルに対応する、対応しないまでも類似する表現が日本語の中にあればいいのですが、それがまったくない。

社会の究極的な単位としてそれ以上は細分化 (divide) できない (individe) 唯一の存在、といった意味として福澤はこれを受け取ったのです。さすが福澤というべきみこ

とな受け取り方だったのですが、こういう概念は当時の日本には存在していない。そこで福澤は「独一人」という訳語を当てはめたのですが、そういつてはなんですが、こんな小難しい表現が社会に定着するはずがありません。四字のうちからやがて「独」が落ち、「一」も落ちて、「個人」だけが残り、ついには「人」まで落ちて「個」として使われるようになったのだそうです。

当時の日本には藩や国が存在していたのは間違いないのですが、そこに属する人間は「身分」として存在しているのであって、個人として存在していたわけではなかったという事です。

## 血脈、天皇

柳父章さんの著書に「翻訳語成立事情」(岩波新書) があります。私がここで書いていることは、ほとんどが柳父さんのこの著作から得た知識をもとにしています。ついでながら柳父さんのこの本によりますと、ソサイエティ (society) は「社会」と翻訳されておりすが、これは個人を構成単位とする人間関係のことです。往時、日本には「世間」

という表現はありましたが、個人の人間関係としての社会という観念は存在していなかったそうです。柳父さんによれば、言葉が「人間の道具」として使いこなされているのではなく、逆に、何らかの意味で、ことが人間を支配している」というのです。

漢字というのは、それを使う人間の考えを強く縛る表意文字です。ですから、個人とか社会とかに対応する現実があるかどうかにかかわらず、表現自身が自己運動して、むしろ表現が現実を支配する可能性があること、このことを私どもは知っておく必要があります。

日本国憲法第一二条は「すべて国民は、個人として尊重される」とあります。また二四条には「婚姻は、両性の合意のみに基いて成立し」とあります。後者において、婚姻は完全に平等な個人と個人の合意によって成り立つと書かれています。この世で最も基礎的な共同体である家族の形成主体であるはずなのですが。

私はこれまでのところで、(一) 現世を構成しているものが生者のみだというのは大変な思い違いである

こと。(二) 私という存在は、祖先に発し曾祖父、祖父、父母を経て私につながる長い血脈の中を生きている一人の旅人であること。(三) 現世を生きている自分自身に究極的な存在意義を見出そうという思想が個人主義であること。この三つのことを主張してきました。

こういった主張と深い関係にある事実が天皇家の中にあります。人間には誰も祖先があり、曾祖父があり、祖父があり、父母があつて現在の自分があるのですが、こういう血脈の連続性をどうしたら確認できるのでしょうか。意識するしかないとかかわらず、おそらく多くの人々は、限りある個々の人間の人生が代々つづく血脈の中にある、そのことを「万世一系」の天皇家の歴史の中に感じ取っているのではないかと、私は思うのです。

コロナ禍の一年が過ぎました。共同体を失った個人にとって、この一年はなんと辛く切ない時期であったに違いありません。生者と死者、血脈、個人と共同体といった用語法で、それぞれの人生、日本のこれからについて考える重要な機会が今なのではないかと私は思うのです。